

平成29年度活動実績ならびに平成30年度活動計画案を審議 「交通安全。アクション」実施計画などを了承



あわせて日本自動車研究所の自動運転評価拠点「Jtown」を視察

第1回 交通安全委員会開催

日 本自動車会議所は平成29年12月18日、茨城県つくば市の日本自動車研究所（JARI）内会議室で、平成29年度第1回交通安全委員会（委員長＝木場宣行・日本自動車整備振興会連合会専務理事）を開催した。委員会では、平成29年度の活動実績報告と平成30年度の活動計画の提案について説明が行われ、了承された。また委員会審議の後、当委員会ならびに道路・環境委員会と合同でJARIの自動運転評価拠点「Jtown」の視察を行った。

1. 委員会審議

(1) 平成29年度活動実績

委員会活動・会員研修会では、健康起因による交通事故の発生を取り上げ、北里大学医療衛生学部リハビリテーション学科視覚機能療法学専攻の川守田拓志准教授より「眼から考える交通安全」という新しい切り口テーマによる研修会を実施。会議所主催の交通安全啓発イベント「交通安全。アクション」では、関係団体の支援により4月に新宿、11月にお台場にて開催し、参加団体や来場者を拡大したことなどが事務局より報告された。

(2) 平成30年度活動計画

委員会活動・会員研修会では、健康起因に加え、加齢や先天的多様性など新たな切り口を探求し、最新事情に精通する専門講師による研修会を実施する。「交通安全。アクション」については、前年度と同じく、4月に新宿、10～11月の間にお台場で実施予定とし、来場者の特性に合致した内容で展開するなどの提案があり、全て了承され、委員会は終了

となった。

2. JARIの自動運転評価拠点「Jtown」視察

続いて、道路・環境委員会委員も合流し、JARIの自動運転評価拠点「Jtown」の視察を行った。初めにJARIの半田茂専務理事からご挨拶をいただき、続いて国際渉外広報室の藤井健室長より、JARIの概要紹介の後、①特異環境試験場、②V2X市街地、③多目的市街地からなる「Jtown」の視察に移った。

①特異環境試験場は、全長200m、3車線の走路を有する施設で、特異環境として降雨・霧・逆光などを再現することで、周辺環境認識技術の評価実験が行なわれている。降雨量も30/50/80mm、霧も視程15～80mの環境にすることができ、さらに日射装置により薄暮状態にするなど様々な道路環境を再現できる。当日は、降雨量の差や、白い雨合羽を着たマネキンが霧の中に溶け込んで見えなくなっていく状況などを見学した。＝写真①＝

②V2X市街地は、V2X（車車間/路車間/歩車間）技術を活用するためのインフラ設備が備えられており、「インフラ協調型安全運転支援システム（DSSS）や光ビーコンを利用したグリーンウェーブの評価実験を実現する設備が整っている」との説明を受けた。＝写真②＝

③多目的市街地は、100m四方の多目的エリアに移動式の白線や横断歩道、緑石ブロック、工事用フェンスやバリケードなどを設置することで交差点の異なる交差点やラウンドアバウトを設定でき、さまざまな道路状況での安全・円滑な走行技



特異環境試験場の視察

術の評価実験が可能となっている。

自動運転については、産官学で開発が急速に進められており、こうした動きに対応するJARIの取組



V2X市街地の視察

みの一端を感じ取れる視察となった。視察後、当日のプログラムは終了し解散となった。



実験車両の前に立つ東京都の猪熊副知事(右)とZMPの谷口社長

東 京都と国が共同で設置した「東京自動走行ワンストップセンター」の支援を受けて、遠隔型自動運転システムの公道実証実験が昨年12月14日、お台場地区の日本科学未来館付近の道路で行われた。遠隔型自動運転システムの公道実験は、同日に愛知県などが実施した実験とともに全国で初めて。実施者のロボット関連技術ベンチャー企業、ZMP（東京都文京区）はタクシーへの応用を目指している。

遠隔型自動運転システムは、車両外にいる運転者が電気通信技術を利用して当該自動車の運転操作・監視などを行う自動運転技術で、完全自動運転実現への第一歩と位置づけられている。実証実験は、昨年6月1日に警察庁が策定した「遠隔型自動運転システムの公道実証実験に係る道路使用許可の申請に対する取扱いの基準」に基づき実施される。

実証実験に先立つ開会式で、ZMPの谷口恒社長は「2020年に無人タクシーを実現するという目標に向けて、今日は非常に大きな第一歩をしるす記念すべき日となる」と強調。東京都の猪熊純子副知事は「自動運転技術は成長戦略として非常に大事なのもちろんだが、交通渋滞、交通事故の解消や人手不足対策などさまざまな社会課題の解決に大きなポテンシャルを持っている。都としても全力で支援していく」と挨拶した。さらに、自動走行タクシーの開発でZMPと協業している日の丸交通（東京都文京区）の富田和孝社長は「タクシー業界が抱えるいちばん大きな課題は人手不足だ。自動運転を1年でも早く導入できるように取り組んでいきたい」と語った。

実証実験では、最初にトヨタ自動車のエスティマハイブリッドを改造した実験車両の後部座席に谷口社長と猪熊知事が乗って日本科学未来館の周囲を走行。続いて、完全無人の状態と同じコース走行した。猪熊副知事は車両から降りたあと、「安心して乗れるなと思った」と感想を述べた。

「東京自動走行ワンストップセンター」は昨年9月に設置。最先端のものを含め、あらゆるタイプの自動走行の実証実験について、構想段階から実施に至るまでの相談などを一括して受け付け、関係機関の協力の下でスピーディーに対応することを目指している。これまでに70件の相談が寄せられており、ZMPがその支援を受けて実施される第1号の実証実験となった。 【東京都自動車会議所】